

令和5(2023)年度 事業報告書

「誠実で信頼される人に」
Become a Sincere and Reliable Person

すべては生徒のために
—生徒が輝く学校づくりを目指して—



学校法人 鈴鹿享栄学園

目次 Contents

はじめに	1
------	-------	---

I. 学校法人の概要

1. 建学の精神	2
2. 鈴鹿享栄学園の沿革	4
3. 役員	6
4. 評議員	6
5. 理事会・評議員会の開催状況	7
6. 経営方針	8
7. 環境整備	8
8. 生徒数	9
9. 教職員数	9

II. 事業の概要

1. 鈴鹿高等学校	10
2. 鈴鹿中等教育学校	17

III. 財務の概要

1. 資金収支計算書	23
2. 事業活動収支計算書	24
3. 貸借対照表	26
4. 有価証券	26
5. 財産目録	27
6. 借入金明細表	27
7. 財務比率	28

はじめに



1. はじめに

本学園は、平成26（2014）年、享栄学園から分離し鈴鹿享栄学園として、新しいスタートをきり10年が経過いたしました。法人分離は、各学校の特色や強みをより一層生かし、生徒、保護者、地域のニーズを把握し、さまざまな課題に対して迅速な決断と改革に取り組むとともに将来にわたる安心と明確な責任体制の確立を趣旨として行われ、この10年間でかなりの成果が挙げたと確信しています。

本学園は、少子化が今後さらに進み、就学人口が大幅に減少して行くなど厳しい時代を乗り越え、建学の精神「誠実で信頼される人に」に基づいた社会で生き抜く力を持つ優秀な人材を輩出する学園として発展し、将来にわたって存続しなければなりません。

また、教育を取巻く社会情勢は、大きく変貌してきており、グローバル化の進展、国の学習指導要領の改訂や大学入試制度改革、高大接続改革等の変化に対しては、即応、先取りした教学システムの構築、提供、さらに組織改革等を行う必要があります。

2. 経営方針

これらの環境認識のもと、令和5（2023）年度に、経営方針について全教職員が参画して「生徒、保護者、地域の満足度向上」、「安定性、持続性、発展性を担保できる経営の展開」、「全員参画型組織の構築」の3点であることを再確認し、今後もこの方針でいくことにしています。

3. 令和5年度事業

経営方針に基づき高等学校及び中等教育学校の事業計画として盛り込んだ教学改革、生徒支援事業、進路支援事業等を着実に実行しました。

また、教学品質の向上のために高等学校コース制改革の完成及び中等教育学校の確立を受け、その成果と課題の検証に取り組み、両校の更なる魅力化をめざしての研究・準備、時代の変化に即応できる指導体制と教育環境の整備、優秀な教職員の確保と教職員研修体系の充実、進路実績の向上、クラブ活動の活性化、生徒募集の強化、経営基盤の安定化、財務体質の強化、危機管理体制の強化等を併せて実行しました。

以上

令和6年5月30日

理事長 渡辺 久孝

I. 学校法人の概要

1. 建学の精神

「誠実で信頼される人に」

Become a Sincere and Reliable Person

鈴鹿享栄学園の源流である享栄学園は、創立者の堀榮二が、米国で修得した実社会に役立つ教育の実践を目指し大正2年に「英習字簿記学会」として開塾し、同4(1915)年に、「有陰徳者その後、必享其栄」（陰徳ある者は、必ずその栄を享く）の精神を尊び名付けた享栄学園が認可された。誠実さを基にして生徒は教師を信頼し、教師はまた生徒を信頼することのできる教育の場にして、ここで培った信頼感を社会に広げたいと願った「誠実で信頼される人に」を建学の精神として確立し、次の具体的目標を示し、地域に根ざす学園を目指している。



1. あてになる人物になろう

あてになる人物とは、頼りになる人、信頼できる人、頼もしい人のことである。付和雷同しない思慮の深さと意志の強さをもつ人、和して動じない勇気をもつ人である。お互いに不信をいだかなければならないような社会ほど不幸な社会はない。現代人の危機は、人間がお互いの信頼性を欠いている点にあるのではなかろうか。

2. 働くことの喜びを知ろう

日本人は、本来勤勉な国民である。戦後の荒廃から立ち上がり、今日の経済的繁栄をもたらしたのは日本人の勤勉さの賜である。勤勉な資質の裏付けがあってはじめて、豊かさを享受することができ、生活にゆとりを持つことが可能となろう。われわれは自己の仕事を愛し、仕事に忠実であり、仕事に打ち込むことができる人でなければならない。

3. 全力をふるって事にあたる体験をもとう

勉学であれ、スポーツであれ全力を傾けて打ち込むことが望ましい。例えば、スポーツで、炎天下体力の限界ぎりぎりまで、強力な精神力で自己に打ち克つといった体験をすることが非常に貴重である。こうした体験は、本人の自信にもつながり、実社会に出ても大いに役立つことであろう。実社会でスポーツ選手が歓迎される所以もここにある。

4. 感謝の気持ちと畏敬の念をもとう

創立者は、感謝の念の強い人であった。仏教に帰依し、昭和5年(1930年)に享栄寺本堂を建立したのもこの感謝の念からであった。たえず不平不満を感じる人ほど不幸な人はない。小さな好意や親切にも感謝できる人は幸福である。感謝の念に裏付けられて社

会は明るくなり、健全な進歩が期待されるのである。また、われわれは生命の根源に対して畏敬の念をいだくべきである。われわれは自ら自己の生命を生んだのではない。われわれの生命の根源には父母の生命があり、民族の生命があり、人類の生命があり、宇宙の生命がある。ここにいう生命とは、単に肉体的な生命を指すのではない。われわれには精神的な生命がある。このような生命の根源に対する畏敬の念が真の宗教的情操であり、人間の尊厳と愛もこれに基づいて生ずるのである。

5. 正しく日本を愛し、国際的視野を広げる人になろう

創立者は、長らくアメリカに滞在し国際的視野を身につけ、技術的にはアメリカのものを多く導入したが、精神的には強く日本のよさにひかれ、国を愛する念が強かった。今後ますます進展する国際化時代を迎え、国際社会で活躍していくためには、正しく日本を愛し、その上で、国際的視野を広げ、異文化を理解し、人間愛に基づく広い視野をもって、国際社会の要請に応えていかなければならない。今日、世界において、国家に所属しないいいかなる個人もなく、民族もない。国家は世界において最も有機的であり、強力な集団である。個人の幸福も安全も国家によるところが極めて多い。自国の存在に無関心であり、その価値の向上に努めずして、その価値を無視したり、その存在を破壊しようとする者は自国を憎むものである。われわれは日本を正しく愛さなければならない。



[享栄]の由来

本学園に「享栄」の名称がついたのは、大正4(1915)年4月「享栄学校」として認可されたときからです。学園のアメリカ式実務教育に興味を持っていた名古屋市長阪本鈺之助氏(在任明治44(1911)年7月～大正6(1917)年1月)が創立者堀 榮二先生に名付け親を頼まれ「有陰徳者必享其栄」とお書きになったのが、もととなりました。

<名 称> 学校法人鈴鹿享栄学園

<法人設立> 平成26(2014)年4月1日

<設置学校> 鈴鹿高等学校  〒513-0831 三重県鈴鹿市庄野町1260
 鈴鹿中等教育学校  〒513-0831 三重県鈴鹿市庄野町1230



鈴鹿高等学校



鈴鹿中等教育学校

2. 鈴鹿享栄学園の沿革（平成26年3月までは、享栄学園の沿革を記載）

大正 2（1913）年	6月	英習字簿記学会として名古屋市中区南呉服町に発足
大正 4（1915）年	4月	坂本市長命名の「享栄学園」認可（KYOEI BUSINESS COLLEGEと称す。）
大正 7（1918）年	10月	実業学校令による乙種認可校となり、享栄貿易学校と校名変更
大正10（1921）年	12月	甲種商業学校として認可される
大正14（1925）年	4月	実業学校令による甲種認可校（5年）に昇格、享栄商業学校に校名変更
大正14（1925）年	9月	名古屋市長命の「享栄学園」認可（KYOEI BUSINESS COLLEGEと称す。）
昭和19（1944）年	3月	財団法人享栄学園を設立、享栄女子商業学校に校名変更
昭和23（1948）年	4月	学制改革により享栄商業高等学校、享栄中学校として発足
昭和26（1951）年	3月	学校法人享栄学園となる
昭和29（1954）年	4月	享栄幼稚園設立
昭和37（1962）年	4月	享栄商業高等学校に工業課程を開設
昭和38（1963）年	4月	鈴鹿高等学校を三重県鈴鹿市に、普通科・商業科開校
昭和40（1965）年	3月	享栄中学校廃校
昭和41（1966）年	4月	鈴鹿短期大学を三重県鈴鹿市に開校家政学科
昭和42（1967）年	10月	享栄商業高等学校、校名を享栄高等学校と変更
昭和43（1968）年	4月	享栄高等学校に普通科開設
昭和44（1969）年	2月	鈴鹿短期大学に家政第3部が認可
昭和45（1970）年	1月	鈴鹿高等学校に定時制設置
昭和51（1976）年	4月	享栄商業タイピスト学校を享栄タイピスト専門学校に校名を変更し、専門課程・高等課程・一般課程を設置
昭和54（1979）年	9月	鈴鹿高等学校の定時制廃止
昭和58（1983）年	4月	享栄高等学校栄徳分校を愛知県長久手町に普通科開校
昭和59（1984）年	2月	鈴鹿短期大学に商経学科が認可
昭和60（1985）年	4月	享栄高等学校栄徳分校が独立、栄徳高等学校として普通科を開校
昭和60（1985）年	4月	享栄タイピスト専門学校を専門学校享栄ビジネスカレッジと校名変更
昭和61（1986）年	4月	鈴鹿中学校を三重県鈴鹿市に開校
平成元（1989）年	3月	鈴鹿短期大学、家政学科第3部廃止
平成 2（1990）年	3月	専門学校享栄ビジネスカレッジ商業実務一般課程廃止
平成 3（1991）年	4月	鈴鹿短期大学家政学科の名称を生活学科に変更
平成 5（1993）年	12月	鈴鹿国際大学国際学部国際関係学科設置認可
平成 8（1996）年	5月	鈴鹿短期大学商経学科廃止認可
平成 9（1997）年	12月	鈴鹿国際大学大学院国際学研究科及び国際学部国際文化学科認可
平成10（1998）年	4月	鈴鹿短期大学、校名を鈴鹿国際大学短期大学部と変更認可
平成12（2000）年	10月	鈴鹿国際大学国際学部観光学科設置認可

平成13（2001）年	8月	鈴鹿国際大学国際学部英米語学科設置認可
平成16（2004）年	4月	鈴鹿国際大学国際学部国際関係学科の名称を国際学科に変更
平成17（2005）年	3月	享栄高等学校通信制課程廃止認可
平成17（2005）年	3月	専門学校享栄ビジネスカレッジ商業実務高等課程廃止認可
平成18（2006）年	4月	鈴鹿国際大学短期大学部、校名を鈴鹿短期大学と変更
平成20（2008）年	4月	鈴鹿国際大学国際学部の名称を国際人間科学部に変更
平成22（2010）年	3月	専門学校享栄ビジネスカレッジ廃校
平成22（2010）年	11月	鈴鹿高等学校全日制課程商業科廃止認可
平成23（2011）年	2月	鈴鹿短期大学専攻科設置認可
平成23（2011）年	4月	鈴鹿短期大学生活学科の名称を生活コミュニケーション学科に変更
平成24（2012）年	4月	鈴鹿短期大学が鈴鹿国際大学郡山キャンパスへ移転
平成25（2013）年	11月	学校法人享栄学園 創立100周年 鈴鹿高等学校創立50周年
平成26（2014）年	3月	3法人（享栄学園、愛知享栄学園、鈴鹿享栄学園）に分離認可
平成26（2014）年	4月	法人分離により、学校法人享栄学園、学校法人愛知享栄学園、学校法人鈴鹿享栄学園発足
平成28（2016）年	11月	鈴鹿中学校創立30周年
平成28（2016）年	12月	鈴鹿享栄学園武道場完成
平成29（2017）年	3月	鈴鹿中等教育学校設置認可
平成29（2017）年	3月	鈴鹿享栄学園情報メディア教育センター完成
平成29（2017）年	4月	鈴鹿中等教育学校開設
平成31（2019）年	3月	鈴鹿中学校廃止認可
令和3（2021）年	11月	鈴鹿中等教育学校（旧鈴鹿中学校）創立35周年
令和5（2023）年	11月	鈴鹿高等学校創立60周年

以上

3. 役員（令和6（2024）年3月31日現在）

定数 理事5～9人、監事2人

現員 理事 7人、監事2人

	氏名	現職等
理事長	渡辺 久孝	鈴鹿中等教育学校長
理事	奥野 元洋	常務理事 事務局長
理事	松井 慎治	鈴鹿高等学校長
理事	兼子 勝	学外理事
理事	真弓 清司	学外理事
理事	箕輪田 晃	学外理事
理事	金子 一也	学外理事

	氏名
監事	藤原 伸雄
監事	堤 達彦

- ※ 私立学校法により、学校法人の役員は、理事及び監事とし、代表権は、理事長にあると定められている。
 また、同法で、「学校法人に、理事をもって組織する理事会を置く。」「理事会は、学校法人の業務を決し、理事の職務の執行を監督する。」と定められており、理事会は、学校法人の決議機関となる。
- ※ 監事は、同法により、その職務を学校法人の業務及び財産の状況を監査することと定められ、理事会に出席し意見を述べ、監査報告書を作成し、理事会・評議員会に提出する。監事の選出に当たっては、理事、評議員又は学校法人の職員と兼ねてはならないとし、監査の公正を保っている。

4. 評議員（令和6（2024）年3月31日現在）

定数 11～19人

現員 15人

大西 正人	小松 貞則	林 千賀	鈴木 壽一
南条 雄士	豊田 恵理	河田 勝正	篠原 章矩
奥野 元洋	松井 慎治	橋詰 福子	川又 俊則
樋口 哲也	山部 芳則	近藤 隆則	

- ※ 評議員会は、学校法人の重要事項（予算、借入金、基本財産の処分、事業計画、寄附行為の変更等）について、理事長から意見を求められる諮問機関となる。

5. 理事会・評議員会の開催状況

令和5年度は、寄附行為に基づき理事会、評議員会を開催しました。

令和5年度に行われた開催日と議案等は以下のとおりです。

	日程	議案等
理事会	令和5年5月25日	令和4（2022）年度事業報告書（案）及び決算書（案）について 評議員の推薦について
	令和5年6月29日	令和5（2023）年度第一回補正予算（案）について
	令和5年10月26日	令和6（2024）年度予算編成方針（案）について 全国高等学校駅伝競走大会出場に係る寄付金募集について 寄付金募集に関する理事会及び評議員会の事前承認について
	令和5年12月21日	令和5（2023）年度第二回補正予算（案）について 令和6（2024）年度予算編成方針（案）について
	令和5年2月22日	学納金の改定について 学校法人鈴鹿享栄学園管理規則の一部改定について 鈴鹿高等学校学則の一部（教育課程）改定について 学校法人鈴鹿享栄学園専任職員給与規程の一部改定について
	令和6年3月21日	理事選任等について 監事選任について 評議員選任等について 理事長及び常任理事の選出について 理事長の職務代行者の順位及び理事の担当業務について 令和6（2024）年度事業計画書（案）及び当初予算（案）について 学校法人鈴鹿享栄学園専任職員就業規則の一部改定について 学校法人鈴鹿享栄学園常勤職員就業規則の一部改定について 学校法人鈴鹿享栄学園非常勤職員就業規則の一部改定について 学校法人鈴鹿享栄学園無期常勤職員就業規則の一部改定について 学校法人鈴鹿享栄学園無期非常勤職員就業規則の一部改定について 学校法人鈴鹿享栄学園常勤職員給与規程の一部改定について
評議員会	令和5年5月25日	令和4（2022）年度事業報告書及び決算書について 評議員の選任について
	令和5年6月29日	令和5（2023）年度第一回補正予算（案）について
	令和5年11月9日	全国高等学校駅伝競走大会出場に係る寄付金募集について 寄付金募集に関する理事会及び評議員会の事前承認について
	令和5年12月21日	令和5（2023）年度第二回補正予算（案）について
	令和6年3月21日	理事選任について 監事選任について 評議員選任等について 令和6（2024）年度事業計画書（案）及び当初予算（案）について

6. 経営方針

1. 生徒、保護者、地域の満足度向上

- (1) 教学品質・体制の改革
 - ①高等学校コース制の完成、中等教育学校の確立を受けた成果と課題の検証
 - ②時代の変化に即応できる指導体制と教育環境の整備
 - ③優秀な教職員の確保と教職員研修体系の充実
- (2) 進路実績の向上
- (3) 生徒募集の強化
- (4) クラブ活動の活性化

2. 安定性、持続性、発展性を担保できる経営の展開

- (1) 経営基盤の安定化・・・財務体質の強化
- (2) 働き方改革に繋がる組織整備と教職員の処遇改善
- (3) 安全安心な学校づくり・ハラスメント対策など危機管理体制の強化

3. 全員参画型組織の構築

- (1) 高い目標への挑戦
- (2) 全員が参画し、全員で方策を決め、全員で実行する組織づくり
- (3) P D C A サイクルを活用した改革の継続

7. 環境整備

事業の必要性、緊急性、安全性に基づき実施範囲を絞り込み、次の事業を行った。

(1) 統合型校務支援システム導入 生徒データの一括管理	20,832千円
(2) 5号棟空調設備更新 老朽化による更新	8,734千円
(3) 印刷機・複写機更新 リース満了で再延長不可	6,282千円

8. 生徒数 (5月1日現在)

鈴鹿高等学校

(単位 人)

学年	令和5年度					令和4年度					増減				
	総合	探究	特進	他	計	総合	探究	特進	他	計	総合	探究	特進	他	計
1学年	229	61	36	1	327	211	61	48	1	321	18	0	△12	0	6
2学年	203	59	47	0	309	228	60	31	0	319	△25	△1	16	0	△10
3学年	223	57	31	0	311	192	79	33	1	305	31	△22	△2	△1	6
合計	655	177	114	1	947	631	200	112	2	945	24	△23	2	△1	2

※「他」は入学と同時に留学のためコースに属さず

鈴鹿中等教育学校

(単位 人)

学年	令和5年度			令和4年度			増減		
	特進	医進	計	特進	医進	計	特進	医進	計
1学年	72	65	137	52	68	120	20	△3	17
2学年	47	70	117	59	95	154	△12	△25	△37
3学年	57	92	149	42	84	126	15	8	23
4学年	39	82	121	73	43	116	△34	39	5
5学年	62	47	109	61	56	117	1	△9	△8
6学年	59	56	115	65	43	108	△6	13	7
合計	336	412	748	352	389	741	△16	23	7

9. 教職員数 (令和5(2023)年5月1日現在)

(単位 人)

部門	教員		職員		専任・常勤計	非常勤計	合計
	専任・常勤	非常勤	専任・常勤	非常勤			
鈴鹿高等学校	56	27	8	13	64	40	104
鈴鹿中等教育学校	46	25	3	4	49	29	78
合計	102	52	11	17	113	69	182

II. 事業の概要

1. 鈴鹿高等学校

1. 教学改革

(1) 教育充実のための取り組み

令和5年度は、学校創立60周年を迎え、全校生徒947名（入学生324名）のスタートとなった。これまでコロナの影響で縮小開催しかできなかった学校行事（文化祭・競技会等）が平常開催となり活気が戻り、生徒たちの生き生きとした姿が見られた。進路実績では、昨年度特進コース1期生が残してくれた実績に続き、国公立合格者が特進コース11名、探究コース4名という結果を残した。クラブ活動では、世界大会・全国大会・東海大会・県大会で活躍する生徒が増えており、今後も期待ができる。生徒募集では、受験者数は昨年並みであったが、入学者数は募集定員（330名）を大きく超える354名となった。

① 特進コース

1年生は、36名1クラスでスタートし、具体的な目標としては「挨拶をする・時間を守る・規則を守る・期限を守る・事前に計画を立てる力を身に着ける」という目標を掲げた結果、生活指導面では問題がなく、特別指導の生徒もいなかった。また、ルールやマナーを身に付けるといった部分では、ときめきサポートを利用したlocusプログラムでマナー講習、職業体験を通じてルールやマナーを守ることの大切さを実感する生徒が多く見られた。学習計画立案については、多くの生徒が振り返りを中心にスコラ手帳を活用していた。その方法は、1日の学習内容・出来事を書き留めるというものであったが、当初の目的であった時間・タスク管理という観点では不十分であった。授業についての満足度は高く、競技会・文化祭・locus・ひまわりプロジェクトについても主体的に行動し、活躍する姿が見られた。3回の高大連携授業を通じて大学で学ぶ学問について学びを深めることができた。学校生活アンケートでは、生徒満足度が100%、保護者アンケートでは、保護者満足度（子どもを入学させて良かった）が100%であった。

2年生は、平日・休日の学習時間を増やすこと、自分のスケジュールを手帳やアプリに記録すること、効率的な学習を追求しつつ計画を修正する力を身に付けることを目標にした。昨年度に引き続き中期計画を立てることや、長期休みや模試前等に計画表を作成することはできている。しかし、計画だけで実行できない生徒、計画とのギャップを埋められずに理想を盛り込みすぎている生徒が多いのが現状である。日を追うごとに要求される勉強量が増える一方で、計画の質が上がり、学習量も不足がちである。また、教科担当者が設定した中期計画に乗って学習を進めることができた一方で、設定されていない教科や科目、苦手教科の学習が後回しになっていることが課題である。今年度から「志望理由書の組み立て方」というテキストを用いて、今までどのようなことに力を入れてきて、何を考えて来たかを振り返り、自分という人間について見つめ直させた。また、お互いに他者

分析を行い、自分の強みや役割を客観的に捉えさせたうえで自分の将来や興味・関心・問題意識を掘り起こして文章化したことから自らについて理解が深まった。今後の進路や志望校を考えるきっかけにして大学入試対策に繋げていきたい。

3年生は、学年を跨いだコース集会等を通じて、進路選択や学習方法等について後輩にアドバイスする姿が見られた。1・2年生にとっていい刺激になっただけでなく、最高学年としての自覚を形成することができた。卒業論文に関しては、何とか形にすることができたが、将来の大学での学びに結び付けることができるともっと良かったと感じる。学習計画については、全統模試を中心にして年間10回の模擬試験を全員必須で受験しながら、希望制で検定模試やオープン模試にチャレンジした。改めて計画とマネジメントの大切さを認識した。特進コースの目標である「国公立大学合格」に関しては、1年次から粘り強く意識付けを行ってきた。教科指導の充実は勿論であるが、最後まで国公立大学を受験していく意識や意欲の部分も育てていくことが大切である。その結果、11名(35%)が国公立大学進学を果たすことができた。3年間同一クラス・同一担任で運営してきたことが生徒及び保護者の信頼を得ることができたと考える。保護者アンケートでは、学習面での満足度・進路指導に関する満足度・本校に入学させてよかったが100%と高く、少数コースに対する丁寧な指導に対して評価を得ることができた。

② 探究コース

1年生は、毎朝8時35分より朝学習として、英単語・百マス計算・リテラス(国語教材)に取り組んだ。英単語学習の習慣化、計算・読解力の向上が若干見られたが多数の生徒に浸透させることは叶わなかった。国語科の「論理コミュニケーション」では毎回創意工夫を施した結果、国語の学力の向上が大きく見られた。定期試験の2週間前から学習計画を立てる意識付けをしたが、計画倒れという結果であった。1年を通して家庭学習の時間が飛躍的に伸びた生徒がいたが、ほとんどの生徒は日常的な学習時間が少なく、中学校までと同じような定期試験に対する取り組み程度であった。次年度は、「英単語帳での勉強の仕方」「計算の工夫の仕方」「理科の意識の活用の仕方」「学習時間の確保の仕方」など学習方法を伝えることが必要である。進路学習として、OB・OG交流、文理選択説明会、大学系統・分野別説明会、3年生探究コースの生徒による大学受験体験談会等を行った。自分の進路について真剣に向き合う生徒と興味関心を引き出すにも難しさを感じる生徒が多く、より体験を通して進路について考え、学ぶことができる機会を作っていくことの重要性を痛感した。また、基本的な生活習慣を確立する必要がある生徒も多く、学習指導・進路指導どちらについても一元的な指導では対応できず、個別対応の必要性を感じた。探究活動としてビジネスプラン・locus・QuestionX・科学探究・B級グルメの考案に取り組んだ。それぞれの取り組みの中で、「問いを抱く力」「課題を発見する力」「協働する力」を養い、「ICT機器を用いたプレゼンテーション」「ポスター発表」の技能を身に付けた。ビジネスプランにおいては日本政策金融公庫、QuestionXにおいては教育と探究社、科学探究においては皇學館大学と連携して進めることができた。次年度は、鈴鹿青年会議所と連携して「街おこし企画」を考案・運営していくことが決まっている。1年を通

じて誰一人取り残さない教育活動に当たることを明言し、1年探究という集団としての帰属意識を持てるように取り組んできたが、SNS上でのトラブル等が頻発し、悪気無く他者を傷つけてしまうことがあった。コロナ禍でコミュニケーションが希薄となったことも原因の一つであると考えられる。保護者アンケートの満足度は、99%であった。

2年生は、探究活動として昨年度の延長で、個人探究を行った。2学期当初に中間発表会、2月に最終発表会を行った。外部の各種探究コンテストにも若干名参加し、探究フォーラムへは3名の生徒が出場した。学習面では手帳アプリを導入したが、使い勝手が悪く、生徒の自発的な活用までは繋げることができなかった。学習習慣が付いた生徒は少なく、受験に向けて学習方法や習慣付けの再試動が必要である。探究発表や研修旅行の事前学習発表等を増やすことで、ICT活用スキルやプレゼンテーション能力が向上した。ホームルームやコース連絡は積極的にGoogleClassroomやGoogleChatを活用した。諸活動の振り返りもGoogleドキュメントやマナビジョンを活用したため、特別活動の記録をする習慣が付いた。保護者の満足度は、86%であった。

3年生は、入学時から如何に将来の目標を探し出し、学習意欲を持たせるかが課題であった。学力の基礎を固めるための「朝の小テスト」、知識・考え方を広めるための「天声人語」「探究活動ボランティア」を設定したが、自ら進んで取り組む生徒は少なかった。クラブや校外活動もしっかり取り組む生徒も少なく、成績が悪いから意欲が出ないという悪循環の状態であったが、3年生になり受験の意識が高まると、授業や受験準備の説明会等を真剣に聞く姿が見られ、小論文・志望理由書・面接練習に積極的に取り組むようになった。模試は日程と学力等を判断し全統模試に絞った。探究活動では、活動を通して自分の興味を掘り起こし、希望する進路を見つけ出すことに繋げ、ICTを活用する技能・プレゼンテーション能力を身に付けることができた。その力によって小論文・志望理由書・面接等の練習にGoogleClassroomを有効活用できた。志望理由書の指導は2年生の2月から、面接の指導は8月より開始した。総合型選抜・学校推薦型選抜では総合型(AO)16件、学校推薦型89件、指定校推薦11件とコース大半の生徒が出願し、2学期の時点で80%を超える生徒が第一志望に合格することができた。結果として国公立合格者(4名)、私立大学合格者(106名)短期大学合格者(2名)、専門学校合格者(3名)となり、保護者満足度は83%であった。

③ 総合コース

1年生は、学校行事や授業・総合的な探究の時間では主体的かつ積極的に取り組む生徒が多かったが、コミュニケーション力不足からSNSや生徒間のトラブルが多く見られた。クラブ活動では、全国・東海で活躍する生徒が増え意欲が高まっている。生活指導面では、登下校時に地域住民に迷惑をかけることがあり、根気強くマナーの指導をする必要がある。学習指導・進路指導では、総合的な探究の時間を利用し、分野別進路学習会を行い、大学・専門学校・企業の方から学校案内・入試情報・仕事内容の話を聞き、自分の進路と向き合うことができた。またOB・OGから職業観・仕事内容・受験に向けての話を聞き、より一層進路に対してイメージが膨らんだ。locusにも取り組み、「問い」を作り、その解決に挑

戦する「課題特定・解決力」の育成を図ったが、次年度は、少し内容を改善してして取り組みたい。コロナ禍の生活様式が定着したのか、発熱なしの体調不良でも欠席することに抵抗がない生徒が増え、同時に遅刻数も増えた。学校生活だけでなく普段の日常生活の見直しや心身のケアが必要な生徒も数多くいる。学習面においては、来年度「漢字検定」の資格取得に取り組みたい。保護者アンケートの満足度は97%であった。

2年生は、学校行事には殆どの生徒が積極的に参加することができたが、クラスになじめない生徒もいるため、各ホームルームで面談等を行い改善していきたい。集会・校外研修・研修旅行等で集合時間厳守を徹底したが、守れない生徒がいるので、今後も指導を継続していく。登下校・授業開始時の挨拶では、気持ちの良い挨拶ができるので今後も続けていきたい。多くの生徒は授業に対してしっかりと取り組んでいるが、ベル席や授業に集中できない生徒がいたため、次年度の課題とする。進路指導では、インターンシップを通して自分の将来を見つめるきっかけを作ることができた。また、小論文の書き方講座を受講した後に小論文模試を受験することで、文章を作成する知識、能力を身に付けることができた。保護者の満足度は93%であった。

3年生は、学校行事や総合的な探究の時間等の中でコミュニケーション力を育み主体的に且つ積極的に参加する生徒が多くみられた。クラブ活動では、チームの中心となり、各大会で健闘した。今年度は各クラブの部員たちが他のクラブの大会に応援に行くという姿が多く見られ、各クラブが応援し合い健闘を讃える姿がみられた。幼児教育クラスでは園児の子どもたちとの交流を通し「寛容」「思いやり」を持った行動をとることで、自らの授業に取り組む姿勢を見直すことができた。保育実習を通し、より実践的な進路指導につながったこともあり、14名全員が保育の道に進んだ。看護医療クラスでは、総合的な探究の時間で幅広い医療従事者から医療現場の話を聞いたり、医療体験を実施したことから、将来医療に従事するという立場を理解できるようになった。24名のうち看護関係に16名・医療関係に6名・教育系に1名・社会福祉系に1名が進んだ。就職希望者には文系選択数学IでSPIの試験対策を実施した。授業内で何度も練習問題に取り組んだ結果、1次試験の段階でほぼ全員（29名のうち28名）が合格し、内定をいただいた。保護者の満足度は96%であった。

(3) 研修体制の確立

① 初任者研修の充実

令和5年度初任者研修受講者 高校：3名 中等：4名

令和5年度2年目研修受講者 高校：3名 中等：1名

② 中堅者研修の導入

令和5年度中堅研修受講者 高校：2名 中等：0名

③ ICT教育研修の推進

各教科で授業の研修を行い、各教科工夫を凝らした授業展開ができた。

④ 先進校への視察

和歌山県 私立開智中学校・高等学校へコース体制の視察で訪問した。

東京都 私立関東第一高等学校へICT機器を使った授業の視察で訪問した。

⑤ 多様な受験形態に対応するための小論文・面接指導を向上させるための研修の実施

キャリアアドバイザー（鈴木先生）から小論文指導・志望理由書等の指導を受け、外部開催の小論文講座等の研修にも参加した。

2. 生徒支援事業

(1) 支援事業の充実

多様な表現活動と学習意欲を高めるカリキュラムの充実を図り、知識・技能の習得を基に、思考力・判断力・表現力を育成するための工夫を全教員・全教科に取り入れた。

① 基礎学力の徹底習得と多様な表現活動の充実

朝の漢字・数学・英語等の取り組みを継続して行った。

今年度は、夏期講座・冬期講座・プロジェクト10・特進学習合宿を開催できた。

② 高大接続の拡大

鈴鹿大学（幼児教育）、皇學館大学（探究活動）、鈴鹿医療科学大学（看護医療系）と高大連携による事業を行うことができた。

③ 教育相談体制の整備

担任や学年団がカウンセラーと情報共有をスムーズに行い、対応を考えるためのいじめ防止対策委員会（ケース会議）を機を逃すことなく行った。

(2) ICT環境の整備および生徒用端末機器の利用推進

鈴鹿高校入試前のオンライン授業等にはノートパソコンを貸し出して対応した。

(3) 教育のPDCAサイクルによる成果の可視化

授業アンケート・保護者アンケート（7月、12月）、学力分析によるPDCAで改善を目指した。また、教育目標の具体化・数値化を図り、より客観的な評価ができるようにした。

① 授業アンケート・保護者アンケートの実施

授業アンケートは、11月に全教員が行い、各自の指導改善に繋がっているか、また生徒の学習改善につながっているか確認をした。

保護者アンケートは、7月・12月の保護者懇談会に実施して、学校の教育活動や学校運営の状況について保護者の満足度が90%を上回ることを目標としている。

<令和5年度保護者アンケート結果>

満足度 7月：そう思う55.6%、ややそう思う39.3% 計94.9%（昨年：95.0%）

満足度 12月：そう思う56.7%、ややそう思う38.7% 計95.4%（昨年：94.1%）

② 学力分析

特進コースでは、「模試分析会」を進路指導部と協働で開催し、学年コースと教科担当者との共通理解を深める取り組みをしている。今後、生徒の学力を伸ばし、進学実績を上げていくための取り組みとして、次年度も継続して実施する予定である。

③ 外部研修会による授業力量向上

外部で開催される指導力向上セミナー等に参加し各教科で研修を実施した。

(4) 国際交流の充実

国際的な視野を広げるために、英語の授業で他国の文化に焦点を当て、日本の文化と比較しながら、異文化理解を深める機会を増やし、毎週ネイティブスピーカーによる授業を全学年で行った。短期留学生（2週間・5か月・10ヶ月）として6名が参加した。

<令和5年度 留学実績>

- ・夏季休業中 2 週間の留学（カナダ・トロント） 3名
- ・夏季休業中～5 か月の留学（カナダ・トロント） 2名
- ・夏季休業中～10か月の留学（カナダ・トロント） 1名

<令和5年度 受入実績>

- ・11月下旬 3泊4日（オーストラリア・ブリスベン近郊
ウエリントンポイント高校より生徒16名、教員2名来校）

<令和5年度 2年特進コース研修旅行実績>

- ・11月14日～18日（福島県・ブリティッシュヒルズ） 47名

3. 進路支援事業

確かな学力を定着させて進路選択を広げ、一人ひとりの進路希望を的確に把握した進路指導を推進した。

- ① 国公立大学合格 15名（特進 11名・探究 4名・既卒生0名）
昨年度 21名（特進 15名・探究 5名・既卒生1名）

② 私立大学合格

四年制大学合格者	76校	287名	昨年度	75校	244名
短期大学合格者	7校	10名	昨年度	6校	13名
専門学校合格者	41校	80名	昨年度	43校	74名

- ③ 就職内定者 34名（学校斡旋29名 自営4名 公務員0名 その他0名）昨年度 29名

4. 地域連携・地域貢献事業

地域の清掃活動に参加し、地域との共生を図った。また、生徒会をはじめ、各クラブが施設訪問やボランティア活動を積極的に行った。

① 地元地域清掃活動、地元小学校・中学校への行事参加、及び出前授業参加

- ・庄野地区清掃活動（5/28）高校20名、中等7名、保護者12名、教員2名 計37名参加
- ・庄野地区清掃活動（9/24）高校11名、中等0名、保護者15名、教員2名 計29名参加
- ・庄野公民館主催夏休み講座に美術部が参加、音楽祭に放送部が参加
- ・平田地区さくらまつり（3/30、3/31）ボランティア部が参加
- ・鈴鹿市内企業夏祭り（8/5）太鼓部が参加
- ・出前授業：平田野中、創徳中、大木中、鼓ヶ浦中、千代崎中、内部中に参加

② 施設訪問及びボランティア活動の活性化

- ・ボランティア部によるペットボトルキャップ回収活動
- ・生徒会、ボランティア部による能登半島地震支援募金活動
- ・ボランティア部と有志の生徒が白子海岸の清掃活動に参加

5. 生徒募集・入試に係る事業

本学の教育方針をよく理解し、本学で学びたいという意欲が高い生徒を受け入れるために、あらゆる情報を多様な募集・広報活動で発信し、入学者の確保を図った。

① 入学者確保のための分析・戦略、及び推薦入試の募集活動強化

志願者数	3,554名	（昨年度 3,549名	+5名）
入学者数	354名	（昨年度 324名	+30名）
専願者数	235名	（昨年度 199名	+36名）

② 広報活動の活性化（デジタルコンテンツを一層充実させる）

Web出願4年目で大きなトラブルもなく、昨年よりもスムーズであった。

③ 魅力ある広報イベントの企画

学校訪問：125中学校全てにパンフレット等が配布できた。

施設見学会：3回開催「鈴鹿の強味」「私学と公立の違い」が好評であった。

参加者 生徒294名 保護者222名 計516名（昨年度+48名）

塾説明会：2回開催（9/6、9/7）参加者99名（昨年度99名）中等と同日開催

学校説明会：4日間8回開催定員40名設定で開催。

参加者 生徒318名、保護者283名 計601名（昨年度-20名）

進路説明会：中学校（31校）合同説明会（7会場）塾（4塾）私学展等で説明。

ZOOM説明会：10回開催。参加者214名（昨年度+60名）

鈴鹿チャレンジ模試：11月3日に開催。参加者100名（昨年度±0名）

個別相談会（昨年まではクラブ相談会）：30名参加（昨年度-2名）

特進コース説明会：11月23日開催 参加者38名 保護者43名 計81名（昨年度+37名）

2回目で運営は生徒中心で実施した。生徒手作りのプレゼント
など評判が良かった。参加者が昨年度の2倍近くになった。

④ 中学校・塾との連携強化（学校訪問・塾訪問強化）

中学校訪問は通常通り行ったが、塾訪問の拡大はできなかった。

⑤ 地域への啓発活動（学校通信等の発行）

県内殆どの中学校にパンフレット・鈴高通信を配布することができた。

⑥ 奨学生制度の宣伝

中学校訪問・塾訪問・説明会・広報イベントで、奨学金・就学支援金の説明をした。

⑦ ホームページ・Instagram・ショート動画のツールで鈴鹿高校の魅力を発信

行事ごとにホームページ・Instagramの更新を行い、鈴鹿の魅力を発信することができた。

⑧ 同窓会組織へ積極的にアプローチする

開校60周年記念事業と称して同窓会と連携して鈴鹿の魅力発信に繋げることができた。

注) ・locus・・・地元企業の力を借りて同じ課題に取り組む「探究学習プログラム」

・ひまわりプロジェクト・・・ひまわりを栽培し、種を送り返すという被災地復興支援プロジェクト

・リテラス・・・教科の国語をベースに「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」に関する資質・能力を育成すること

・QuestionX・・・生徒が自ら「問い」を作り、問いを持って生きる面白さを体験するプログラム

・ビジネスプラン・・・社会の課題を解決するビジネスプランの作成に取り組むこと

・科学研究・・・身近な疑問を見つけ、仮説を立て、実験・検証すること

2. 鈴鹿中等教育学校

前期・後期課程完成後のさらなる進化を目指して

生徒一人ひとりの知識・技能、思考力、判断力、表現力を高め、人間性、学びに向かう力を育成するために不断の授業改善を実施し、より質の高い教育を提供することを目指して、以下のような取組を推進した。

1. 教学改革

(1) 中等教育学校の確立を受けた成果と課題の検証

種々の学校行事や学習指導、進路指導体制等について6年間を振り返り、全員で意見交換をした。優先度の高いものから順次議論して次年度の改善につなげていく。

(2) 学力向上のための授業力向上へ

① 生徒が主体的に学び、習慣的に家庭学習に取り組む姿勢の涵養

教科主導で、学年も協力し、追指導等も精力的に実施し、また、生徒個々の状況に応じて課題・補習設定を行ったことで、家庭学習の習慣化を図った。

② 互見授業の促進と充実した授業検討会の定例化

授業見学と授業中の生徒の様子の情報交換を行った。

③ 教科会議の充実 → 指導と評価の一体化による授業改善と教科指導力の向上

→ 知識・技能、思考力・判断力・表現力、学びに向かう力をバランスよく育成
教科会議が生徒の学力の向上につながるよう、教材研究、授業研究、入試問題の研究と多岐に亘る議題で協議を持つことができたが、教科による多少のばらつきが見られるため、会議の持ち方を検討、改善していく。

④ ICT教育の充実

学活や総合、教科の課題回収等でICT機器の使用頻度は増加している。

新1年生より、全員がChromebookを持つことになるので効果的な活用についてさらなる研究および実践を重ねていく。

⑤ 「新しい10年計画」のプロジェクト発足と協議開始

中期計画の最終年度として、新たな中期計画の策定に向けた協議を開始することができた。

(3) 研修体制の確立

① 初任者研修の充実 系統的な初任者研修を継続し、教員としての資質を向上

採用1,2年目の教員を対象とした研修監による講座も毎年資料もブラッシュアップされており、年間行事に応じた内容を優先的に実施するなど、年々充実している。

また、新卒初任者の教科指導力向上(英語)のための研修を外部講師を招いて行うことができた。

② 中堅研修 本校経験10～15年の教員による研究授業の実施

授業のビデオ研究や実際のケースワーク等も多く取り入れながら実施できた。

高等学校とのさらなる交流についても検討していく。

- ③ ICT研修 教科指導好事例の情報収集、研究及び実践を通じたIT活用力の育成
先進校へのベンチマーキングを行った。今後も積極的に取り組む教員の成果と課題を共有していく。
 - ④ 進路指導力向上のための研修体制の充実
外部講師による進路指導の在り方についての研修会を学年主任対象に実施できた。
 - ⑤ 先進校への計画的視察
三重県私学振興会の研修事業を活用することで、県内だけでなく県外の先進校視察も実施することができた。
 - ⑥ 小論文・面接指導力向上研修の実施
進路指導部の教員・キャリアアドバイザーの協力による研修を実施した。
- (4) グローバル教育の推進
- ① 国際交流の充実(姉妹校生徒間のオンラインによる交流をはじめとする国際理解教育の実施)
オーストラリア研修を久しぶりに実施することができた(5年生20人参加)。また、オーストラリアの姉妹校から14名の訪問者を受け入れることができた。
 - ② 海外研修旅行の実施
シンガポール研修旅行(3年次)・セブ島 語学研修(4年次及び5年次)
3年次のシンガポール研修は予定通り実施することができた。
一方、高騰した参加費と受け入れ体制の課題のため、全員参加のセブ島研修を断念し、充実した内容で4,5年次のシンガポール研修を実施した。
令和6年度からの全員参加の海外研修を3年次のシンガポール・マレーシア研修のみとし、4年次に希望者対象としてオーストラリア、セブ島、カナダへの海外研修を実施することを決定した。
 - ③ 海外大学進学・海外留学相談体制の充実及び留学生、帰国子女等の受け入れ
次年度のカナダ研修も考慮しながら相談体制を充実させることができた。
そのため、想定以上の希望者が説明会には集まった。
- (5) 総合的な学習の時間／総合的な探究の時間の充実
- 「総合的な学習の時間」(前期課程)から「総合的な探究の時間」(後期課程)へ6年制の特徴を生かして令和2年度より始めた全教員による指導体制の継続
今年度もTS(テーマ・スタディ)指導を全教職員で実施した。研究の成果を生徒たちがしっかりと発表することができた。今後のTSの在り方については課題として協議する必要がある。
- (6) 取組業績の継承と有効活用
- 各学年の取組を次の学年に継承し、取組のノウハウ等を学校の財産として蓄積していくことの有益性を確認した。

2. 生徒支援事業

- (1) 学習習慣の定着および担任等とのコミュニケーションにClassiの活用することによる、セルフマネジメント力、タイムマネジメント力の育成
Classiだけではなく、紙ベースの手帳、計画表等も併用しながら、学年(学齢)に応じてセ

ルフマネジメント力およびタイムマネジメント力を育成している。

(2) 科学を楽しむ企画の提案

科学の甲子園ジュニア、宇宙エレベーターロボット競技会等のコンテストに積極的に参加し、全国大会に出場するなど好成績を収めることができた。

(3) 教育相談・カウンセリングの充実

不登校傾向の生徒や生徒間のトラブルに悩んでいる生徒に対する適切かつ迅速な対応と関係機関との情報共有

相談室を利用している生徒においては、学年・カウンセラーとこまめに情報共有できた。カウンセラーとつながりを持つことで、適切に学校外の機関とも連携できた。

(4) 情報モラル指導の強化(SNSトラブル防止啓発のための講演会等実施)

7月に1,4年生合同で鈴鹿警察署とKDDIによる講演会を実施することができた。

(5) 生徒会活動の活性化

生徒の要望や意見を受け止め、生徒が主体的により良い学校づくりに参加

鈴青祭の企画は文化クラブの活動を活かせるものを優先するとともに、クラスや有志の企画が多様かつ充実した2日間となった。

生徒の要望はGoogleのアンケートなどを利用し、生徒の声をより吸い上げるようにした。

(6) 資格取得支援等校外でのチャレンジ(英語検定や漢字検定などの資格取得を奨励し表彰)

本年度も多数(45人)の資格試験合格者を表彰することができた。

(7) 生徒の主体的な活動の奨励

ときめきサポート制度や各種コンクール等外部の行事やコンクールへの参加の奨励

ときめきサポート制度に計15チームの応募があり、前期課程4団体、後期課程5団体が採用された。

ブックトレードの実施、模擬国連への参加、児童養護施設への本の寄付、ロボットコンクールへの参加、科学コンクールへの参加など、多様な活動が展開された。本制度開始以来、参加チーム数と内容において最も充実していた。年度末には取組発表会において成果が報告された。また、2年生対象に、3年生の報告がなされ、2年生の動機づけにつながることを期待された。

(8) SGSS(英語力のある生徒による英字新聞作成等)の活動充実

4号を発行。生徒が楽しく取り組んでおり、学校説明会で配付し、大変好評を得た。

(9) 小論文・面接指導に外部人材の導入

6年生だけでなく、他の学年も含めて専門家による指導を受けることができた。

(10) クラブ活動の支援

サッカーボールがネットを超えてトラブルとなったことから、第2グラウンドのネット嵩上げ工事を3月に行った。

(11) スクールバスの運行適正化

長年の課題であったコンプライアンス上の課題を解決することができた。

また、加佐登便を新設することができた。

3. 進路支援事業

(1) 進路保障

- ① 大学入試実績の向上、難関国公立大学20名以上、国公立大学及び有名私立大学50名以上
難関国公立15名、国公立大学合格者48名と、目標値に迫る結果を残すことができた。
- ② 各学年の模擬試験等のデータ分析を学校全体で共有し、学年を中心とした学習指導の充実
各学年で模擬試験の結果が出るたびに詳細な結果分析と今後の取組について職員会議で報告し、学校全体で共有し、課題のある教科・科目の向上のための放課後講座等など学年中心に適宜対応した。

(2) キャリア教育の充実

① キャリア教育の体系化

体験から学ぶ(1年次)、職業を知り、職業観・労働観を養う(2,3年次)、
学部・学科を知る(4年次)、志望学部・学科・大学を明確にする(5年次)

これまでのキャリア教育を継続し、今年度も実施した。職業意識や大学の学部への興味を高めるため卒業生などによる講演会なども実施した。

体系化については、目標を整理できたところであるので、次年度に向けて各学年の具体的な取組を示せるようなガイドラインを策定する。

② 教材ENAGEEDを活用した幅広い視野の育成

今年度も教材ENAGEEDを活用し、自分自身の生き方や職業観を育成する体系的な総合学習を各学年で行った。

③ 医学科進学者のための医系進学者育成プログラムの実施

三重大学医学部に在籍する卒業生の講演や予備校講師による医学部受験対策などの医系進学者育成プログラムを実施することができた。

④ 小論文・面接指導の充実

昨年度に引き続きキャリアアドバイザーによる志願理由書作成指導、小論文指導、面接指導を実施した。個別の指導や放課後の定期的な講座による小論文指導、面接指導を実施することができた。

(3) 外部の優れた人材の活用

大学教員や地域の事業主、卒業生による講演会の実施

地域の事業主や三重大学医学部医学科在籍の卒業生などによる講演会を計画通り実施することができた。

(4) 皇學館大学との連携事業の実施

全校体制の連携には至っていないが、初任者の授業力向上に関わっては皇學館大学教授にメンターを依頼し、年間6回の研究授業を実施することができた。今後も様々な分野での協働を模索していく。

4. 地域連携・地域貢献事業

(1) 県内産業の魅力を知る探究学習

県内企業経営者等のゲストティーチャーを招聘したキャリア教育と連動させた取組の実施

株式会社サンケイや赤福の代表など県内有名企業の代表者の方による講演会など、県内の優れた企業等の取組を生徒に周知することができた。

(2) 地域清掃・通学路清掃活動の実施

通学路や学校周辺の清掃(空き缶やごみ拾い)を生徒の主体的活動や地域の方々と協働を可能な限り提供

学期に1度、庄野地区の清掃活動に生徒会と有志が参加した。部活動だけでなく、ボランティアに対する意識が高揚してきている。

(3) 生徒が校外での活動や活躍できるようにサポート体制の構築

活動のひとつとして、ボランティア活動や地元学童保育所等への訪問交流を実施(生徒会・科学部・吹奏楽部等)

吹奏楽部が老人福祉施設でボランティア演奏を行った。科学部は鈴鹿市青少年育成会議主催の科学体験教室にて50名ほど、鈴峰地区の科学体験教室で10名ほどの小学生に対し科学実験や、一般社団法人心花にて小学生～大学生15名ほどに対し、科学体験教室を実施することができた。

また、愛宕小学校、庄野小学校、石薬師小学校の児童約170名に対し、科学体験を題材にした授業も実施することができた。

さらに4年生を中心に、70日間、延べ250名以上が多様なボランティア活動に参加し、地域貢献をするとともに、参加者自身が多くのことを学ぶ機会となった。

5. 生徒募集・入試に係る事業

(1) 医進・選抜コース、特進コースそれぞれの魅力化を図る研究・議論・校内研修会の実施

8月と12月の校内研修会で本校の現状について成果と課題、各コースのあり方について議論する機会を設けることができた。

(2) 受験者の専願率の向上を図るための受験者傾向分析

昨年度と比べて、残念ながら専願者が減少した。そのため、これまでより詳細に志願者、受験者、入学者の専願率、出身地域、塾別の傾向などの詳細分析を行い、来年度の志願者増につなげたい。

(3) 説明会等イベントの充実

① あそびとまなびの体験ラリーの実施

昨年度に続き午前午後に分け参加予約を行うことに加え、講座の事前予約も実施したことから整然と行うことができ、600名を超える参加となり好評を得た。

② 説明会等すべての機会におもてなし精神を発揮し児童・保護者の満足度向上

参加保護者からは、生徒の姿をもっと見たい、話を聞きたいという要望があることから、説明会やイベントでは在校生の出番を多くした。できるかぎり参加者一人一人に丁寧に対応し、参加者が必要とする情報を伝えた。アンケートではおおむね好評を得ることができた。

(4) 広報活動の一層の充実

① ホームページについて適宜新着情報を更新

ホームページトピックスの完全に毎日更新はできなかったが、3月上旬までで162回の更新(昨年度は109回)ができた。

- ② 生徒募集活動のシーズンオフに学校案内リーフレットおよびポスターを作成し広報活動強化
小学校高学年だけでなく、3,4年生も対象とする学校案内印刷物を意識し作成した。

そのため、早期からの広報活動ができた。

今後の取組として、ユニークな学校行事については、鈴鹿市記者クラブ等へのニュースリリースを積極的に行う。

6. 教職員の働き方改革

(1) ICTを活用した業務効率化の推進

令和6年度より、統合型校務支援システムを稼働させるべく、ICT環境整備・教育推進委員会がシステムの構築にしっかり取り組むことができた。次年度はシステムを運用しながら、さらに使い勝手が良くなるように改善を加える。

(2) 教職員業務のスクラップ&ビルドの意識の醸成と実行

業務の継承および検討による改善

スクラップ&ビルドの意識醸成のために、職員の面談シートにその項目を設定するとともに、期首・期末の面談において業務の継承の大切さについても話し合う時間を取ることができた。

III. 財務の概要

1 資金収支計算書

資金収支計算書は、会計年度の教育・研究その他の活動に対応するすべての収支内容並びに支払資金の収支のてん末を明らかにしたものです。

(単位 千円)

		科目	予算	決算	差異	予算比 (%)	
収入の部		学生生徒等納付金収入	900,729	900,754	△ 25	100.0	
		手数料収入	61,567	62,767	△ 1,200	101.9	
		寄付金収入	2,930	4,344	△ 1,414	148.3	
		補助金収入	613,318	624,884	△ 11,566	101.9	
		資産売却収入	0	100,000	△ 100,000	—	<資産売却収入> ・有価証券の償還 100,000千円収入増
		付随事業・収益事業収入	13,857	11,451	2,406	82.6	
		受取利息・配当金収入	3,428	6,690	△ 3,262	195.2	
		雑収入	70,012	69,650	362	99.5	<前受金収入> ・施設維持費等増 12,320千円収入増
		借入金等収入	0	0	0	—	
		前受金収入	182,130	194,450	△ 12,320	106.8	
		その他の収入	89,905	112,453	△ 22,548	125.1	<その他の収入> ・特定資産取崩等増 22,548千円収入増
		資金収入調整勘定	△ 243,748	△ 245,378	1,630	100.7	
	前年度繰越支払資金	949,364	949,364	0	100.0		
	収入の部合計	2,643,492	2,791,429	△ 147,937	105.6		
支出の部		科目	予算	決算	差異	予算比 (%)	
		人件費支出	1,103,919	1,097,525	6,394	99.4	
		教育研究経費支出	267,661	240,379	27,282	89.8	
		管理経費支出	73,110	65,952	7,158	90.2	
		借入金等利息支出	6,709	7,445	△ 736	111.0	
		借入金等返済支出	82,359	82,358	1	100.0	<設備関係支出> ・事業削減等 2,286千円支出減
		施設関係支出	11,080	10,357	723	93.5	
		設備関係支出	33,556	31,270	2,286	93.2	
		資産運用支出	68,630	212,266	△ 143,636	309.3	<資産運用支出> ・特定資産計上増 143,636千円支出増
		その他の支出	75,400	82,181	△ 6,781	109.0	
		小計	1,722,424	1,829,733	△ 107,309	106.2	
		予備費	0	0	0	—	<その他の支出> ・預り金等の増 6,781千円支出増
	資金支出調整勘定	△ 21,893	△ 45,369	23,476	207.2		
	翌年度繰越支払資金	942,961	1,007,065	△ 64,104	106.8		
	支出の部合計	2,643,492	2,791,429	△ 147,937	105.6	<資金支出調整勘定> ・期末未払金の増 23,476千円支出減	

2. 事業活動収支計算書

事業活動収支計算書では、当該会計年度の諸活動に対応する事業活動収入・支出の内容および基本金組入後の均衡の状態を明らかにします。収支を計上のなものと臨時的なものに、さらに経常的な収支を教育活動と教育活動外に分けて把握することができます。

(単位 千円)

教育活動	収入の活動	科目	予算	決算	差異	予算比 (%)	<経常費等補助金> ・地方公共団体補助金増 9,140千円収入増
		学生生徒等納付金	900,729	900,754	△ 25	100.0	
手数料	61,567	62,767	△ 1,200	101.9			
		寄付金	2,930	4,548	△ 1,618	155.2	<人件費> ・教員人件費等 8,554千円支出減
		経常費等補助金	611,318	620,458	△ 9,140	101.5	
		付随事業収入	13,857	11,451	2,406	82.6	<教育研究経費> ・光熱水費減、事業削減・見直等 27,017千円支出減
		雑収入	70,012	69,650	362	99.5	
		教育活動収入 計	1,660,413	1,669,628	△ 9,215	100.6	<管理経費> ・事業削減・見直等 7,137千円支出減
		科目	予算	決算	差異	予算比 (%)	
教育活動	支出の活動	人件費	1,142,959	1,134,405	8,554	99.3	<受取利息・配当金> ・資産運用配当金 3,262千円収入増
		教育研究経費	437,136	408,949	28,187	93.6	
		管理経費	76,041	68,904	7,137	90.6	<資産売却差額> ・有価証券の償還 78,260千円収入増
		徴収不能額等	0	0	0	—	
		教育活動支出 計	1,656,136	1,612,258	43,878	97.4	
		教育活動収支差額	4,277	57,370	△ 53,093	—	<その他の特別収入> ・施設設備補助金増 2,426千円収入増
		科目	予算	決算	差異	予算比 (%)	
教育活動外	収入の活動	受取利息・配当金	3,428	6,690	△ 3,262	195.2	<資産売却差額> ・有価証券の償還 78,260千円収入増
		その他の教育活動外収入	0	0	0	—	
		教育活動外収入 計	3,428	6,690	△ 3,262	195.2	
	支出の活動	科目	予算	決算	差異	予算比 (%)	<その他の特別収入> ・施設設備補助金増 2,426千円収入増
		借入金等利息	6,709	7,445	△ 736	111.0	
その他の教育活動外支出		0	0	0	—		
		教育活動外支出 計	6,709	7,445	△ 736	111.0	
		教育活動外収支差額	△ 3,281	△ 755	△ 2,526	—	
		経常収支差額	996	56,615	△ 55,619	—	
特別	収入の活動	科目	予算	決算	差異	予算比 (%)	<その他の特別収入> ・施設設備補助金増 2,426千円収入増
		資産売却差額	0	78,260	△ 78,260	—	
		その他の特別収入	2,000	5,649	△ 3,649	282.5	
			特別収入 計	2,000	83,909	△ 81,909	—
	支出の活動	資産処分差額	100	0	100	0.0	<その他の特別収入> ・施設設備補助金増 2,426千円収入増
その他の特別支出		0	0	0	—		
特別支出 計		100	0	100	0.0		
		特別収支差額	1,900	83,909	△ 82,009	—	

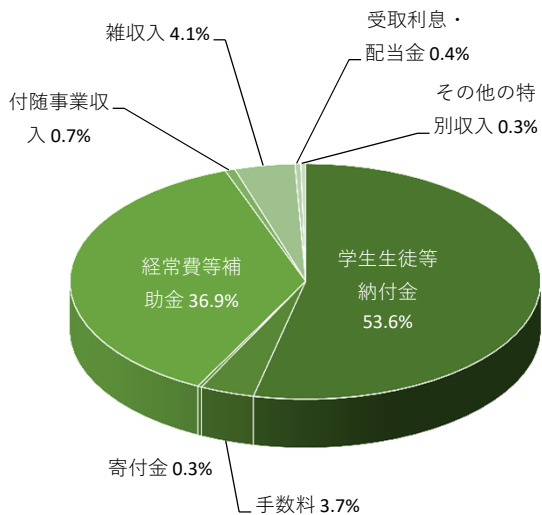
(単位 千円)

科目	予算	決算	差異	予算比 (%)
〔予備費〕	0		0	—
基本金組入前当年度収支差額	2,896	140,522	△ 137,626	—
基本金組入額合計	△ 104,469	△ 63,524	△ 40,945	—
当年度収支差額	△ 101,573	76,998	△ 178,571	—
前年度繰越収支差額	△ 1,994,134	△ 1,994,134	0	—
基本金取崩額	0	0	0	—
翌年度繰越収支差額	△ 2,095,707	△ 1,917,136	△ 178,571	—

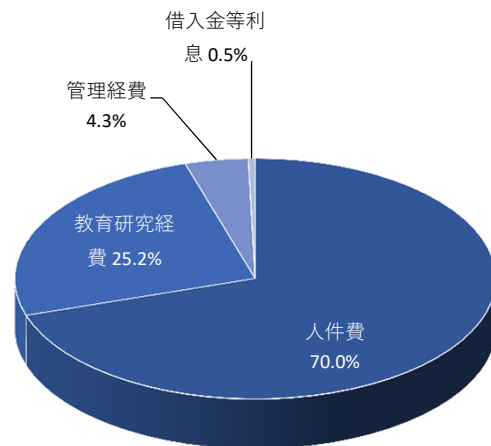
(参考)

事業活動収入 計	1,665,841	1,760,227	△ 94,386	105.7
事業活動支出 計	1,662,945	1,619,703	43,242	97.4

事業活動収入の構成比



事業活動支出の構成比



3. 貸借対照表

貸借対照表は、令和6（2024）年3月31日現在の財政状況を示しています。

（単位 千円）

科目	本年度末	前年度末	増減	前年比 (%)
資産の部				
有形固定資産	2,488,865	2,637,865	△ 149,000	94.4
特定資産	1,266,581	1,127,070	139,511	112.4
その他の固定資産	35,475	14,921	20,554	237.8
流動資産	1,075,936	1,014,743	61,193	106.0
資産の部合計	4,866,857	4,794,599	72,258	101.5
科目	本年度末	前年度末	増減	前年比 (%)
負債の部				
固定負債	763,705	814,409	△ 50,704	93.8
流動負債	433,528	451,087	△ 17,559	96.1
負債の部合計	1,197,233	1,265,496	△ 68,263	94.6
純資産の部				
基本金				
第1号基本金	5,476,760	5,413,236	63,524	101.2
第4号基本金	110,000	110,000	0	100.0
繰越収支差額	△ 1,917,136	△ 1,994,135	76,999	96.1
純資産の部合計	3,669,624	3,529,101	140,523	104.0
負債及び純資産の部合計	4,866,857	4,794,597	72,260	101.5

4. 有価証券

① 総括表

（単位 円）

	当年度（令和6（2024）年3月31日）		
	貸借対照表計上額	時 価	差 額
時価が貸借対照表計上額を超えるもの	295,369,032	354,613,778	59,244,746
（うち満期保証目的の債券）	（ 0 ）	（ 0 ）	（ 0 ）
時価が貸借対照表計上額を超えないもの	101,596,000	100,090,000	△ 1,506,000
（うち満期保証目的の債券）	（ 0 ）	（ 0 ）	（ 0 ）
合 計	396,965,032	454,703,778	57,738,746
（うち満期保証目的の債券）			
時価のない有価証券	1		
有価証券合計	396,965,033		

② 明細表

（単位 円）

種類	当年度（令和6（2024）年3月31日）		
	貸借対照表計上額	時 価	差 額
債券	101,596,000	100,090,000	△ 1,506,000
株式	1,730,000	1,932,400	202,400
投資信託	293,639,032	352,681,378	59,042,346
合 計	396,965,032	454,703,778	57,738,746
時価のない有価証券	1		
有価証券合計	396,965,033		

5. 財産目録 (令和6(2024)年3月31日現在)

(単位 円)

科目	金額	科目	金額
基本財産	2,510,080,807	貯蔵品	364,418
土地	154,713,221	前払金	76,850
建物	2,051,698,067	立替金	564,460
構築物	118,658,576		
教育研究用機器備品	75,635,396		
管理用機器機器備品	2,064,731		
図書	86,095,451	資産総額	4,866,857,356
車輛	1	借入金	741,559,360
電話加入権	661,423	退職給与引当金	108,620,000
ソフトウェア	1	未払金	43,058,333
ソフトウェア仮勘定	20,553,940	前受金	194,450,000
運用財産	2,356,776,549	預り金	109,293,556
借地権	14,259,740	仮受金	252,134
未収入金	67,865,296		
引当特定資産	1,266,580,700	負債総額	1,197,233,383
有価証券	1		
現金・預金	1,007,065,084	正味財産 (資産総額 - 負債総額)	3,669,623,973

6. 借入金明細表

令和5(2023)年4月1日から令和6(2024)年3月31日まで

(単位 円)

借入先		期首残高	当期増加額	当期減少額	期末残高	利率	返済期限	摘要
長期借入金	市中金融機関	百五銀行	385,000,000	0 ^(※)	32,500,000	0.36%	令和18年12月31日	用途：図書館、武道場整備資金 担保：鈴鹿高校・中等教育学校の校地・校舎
		百五銀行	356,559,360	0 ^(※)	54,858,240	1.65%	令和12年6月30日	用途：鈴鹿高校校舎 体育館整備資金 担保：鈴鹿高校・中等教育学校の校地・校舎
		小計	741,559,360	0	87,358,240	654,201,120		
	計	741,559,360	0 ^(※)	87,358,240	654,201,120			
短期借入金	返済期限が1年以内の長期借入金		82,358,240 ^(※)	87,358,240	82,358,240			
	計	82,358,240 ^(※)	87,358,240	82,358,240	87,358,240			
合計		823,917,600 ^(※)	87,358,240	82,358,240 ^(※)	741,559,360			

(※) 長期借入金から短期借入金への振替額である。

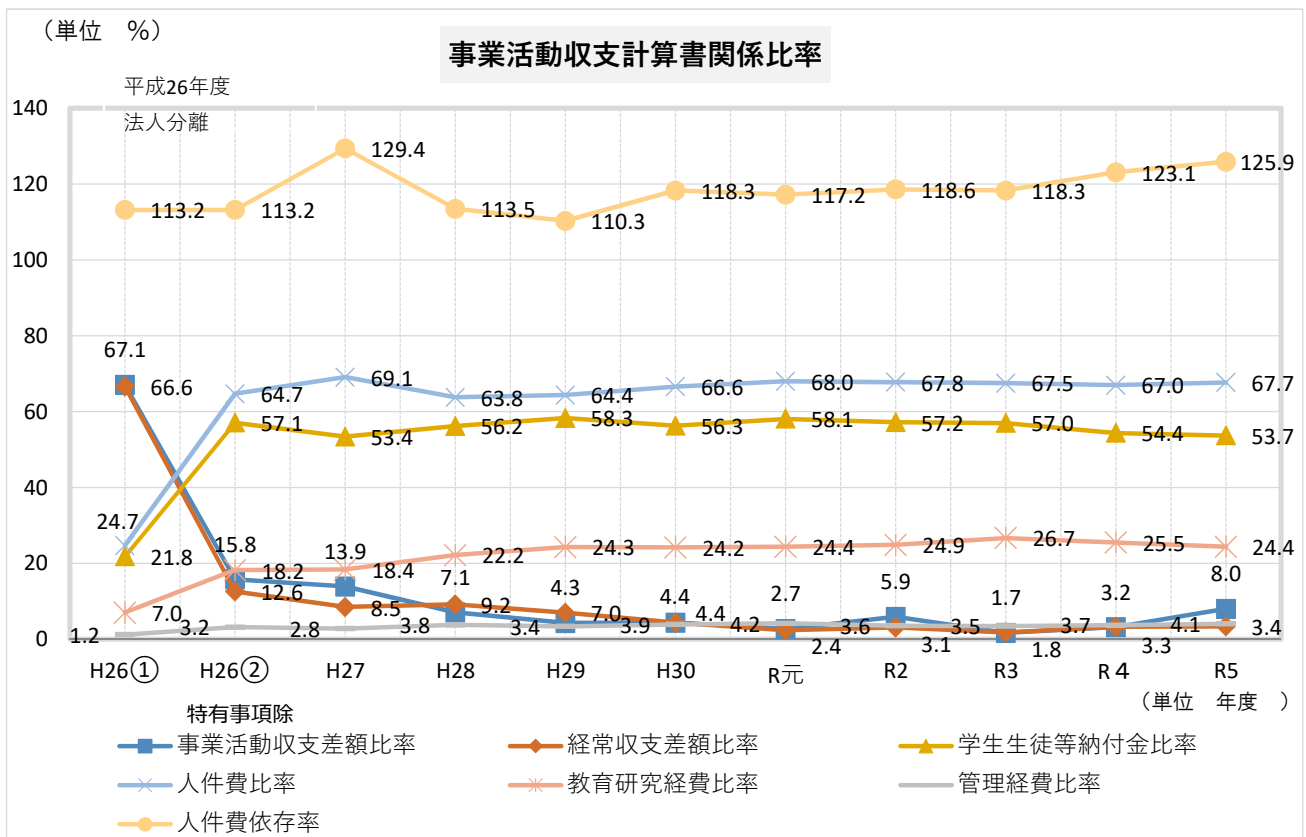
7. 財務比率

事業活動収支計算書関係比率

(単位 %)

分類	比率名	算式	本学園		全国平均	評価指標
			第2回補正	決算		
経営状況はどうか	事業活動収支差額比率	基本金組入前当年度収支差額 ÷ 事業活動収入	0.2	8.0	2.5	↑
収入構成はどうなっているか	学生生徒等納付金比率	学生生徒等納付金 ÷ 経常収入	-	53.7	52.5	～
	寄付金比率	寄付金 ÷ 事業活動収入	-	0.3	3.4	↑
	補助金比率	補助金 ÷ 事業活動収入	-	35.5	35.6	↑
支出構成は適切であるか	人件費比率	人件費 ÷ 経常収入	68.7	67.7	63.0	↓
	教育研究経費比率	教育研究経費 ÷ 経常収入	26.3	24.4	28.7	↑
	管理経費比率	管理経費 ÷ 経常収入	4.6	4.1	6.9	↓
収入と支出のバランスはとれているか	人件費依存率	人件費 ÷ 学生生徒等納付金	126.9	125.9	119.9	↓
	経常収支差額比率	(経常収入 - 経常支出) ÷ 経常収入	-	3.4	1.0	↑
	教育活動収支差額比率	教育活動収支差額 ÷ 教育活動収入計	-	3.4	0.2	↑

評価指標 ↑ 高い値が良い 全国平均：『令和4年度版「今日の私学財政」高等学校・中学校・小学校編』（日本私立学校振興・共済事業団）
 ↓ 低い値が良い



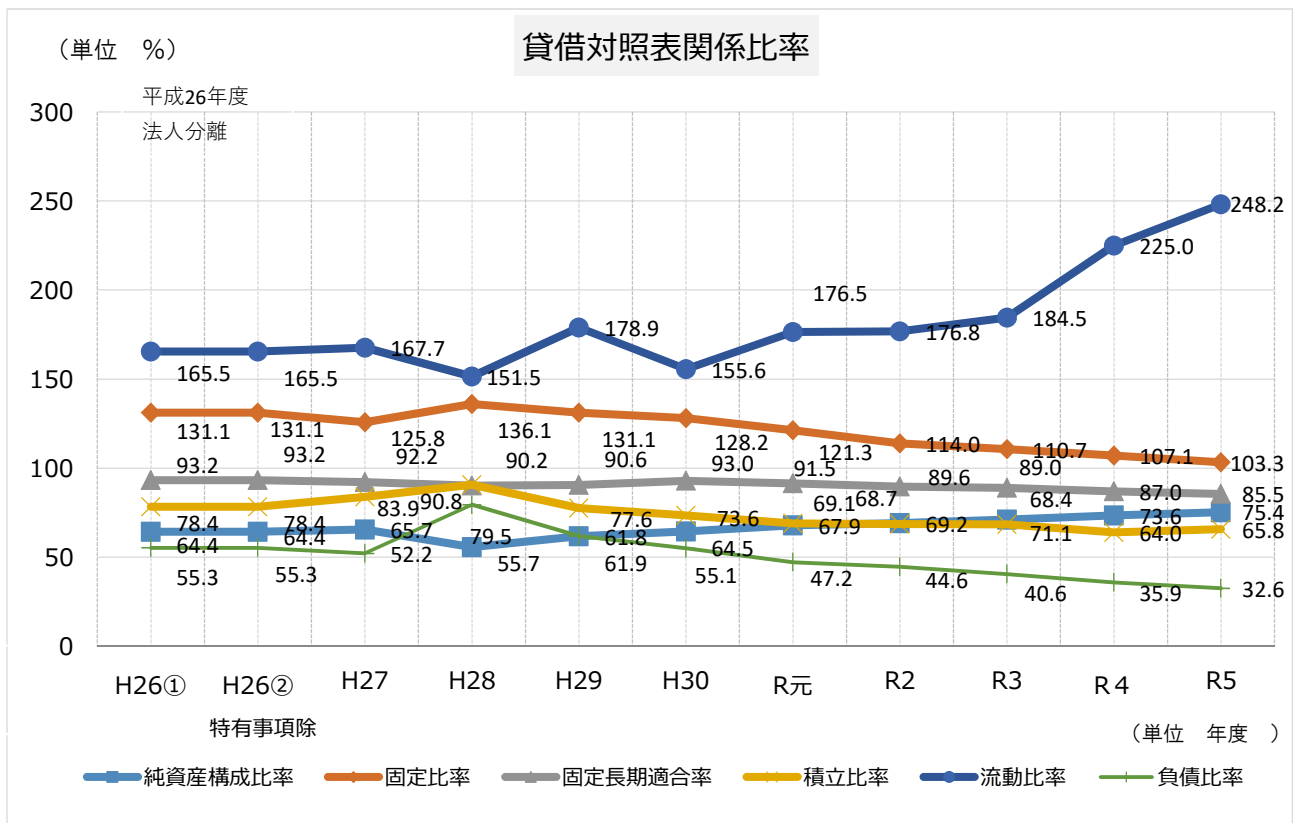
平成26年度と平成27年度は、新会計基準に組替えて表示しています。

貸借対照表関係比率

(単位 %)

分類	比率名	算式	本学園 決算	全国平均	評価 指標
自己資金は充実されているか	純資産構成比率	純資産 ÷ (負債+純資産)	75.4	85.4	↑
長期資金で固定資産は賄われているか	固定比率	固定資産 ÷ 純資産	103.3	98.7	↓
	固定長期適合率	固定資産 ÷ (純資産+固定負債)	85.5	89.8	↓
負債に備える資産が蓄積されているか	積立率	運用資産 ÷ 要積立額	65.8	62.1	↑
	流動比率	流動資産 ÷ 流動負債	248.2	259.6	↑
負債の割合はどうか	負債比率	総負債 ÷ 純資産	32.6	17.1	↓

評価 ↑ 高い値が良い 全国平均：『令和4年度版「今日の私学財政」高等学校・中学校・小学校編』（日本私立学校振興・共済事業団）
 指標 ↓ 低い値が良い





学校法人 鈴鹿享栄学園